

## 大学の通訳演習クラスにおける教材 —記者会見のインターネット動画活用の試み—

西畑香里

(東京外国語大学)

### Abstract

*Many Japanese universities offer interpreting courses and sufficient resources are available for interpreting training. It seems, however, that there is no so-called standard or definitive textbook encompassing the curriculum of an introductory interpreting course. Thus, it is the responsibility of the instructors to select their own pedagogical materials and methodology in each class. Traditional language learning materials are edited textbooks with CDs, but the format presents certain deficiencies: unavailability of renewed content, issues of authenticity, and a lack of portability. Novice learners using this edited format may also find it problematic to visualize the situation in which professional interpreters perform their actual duties. This study uses an Internet press conference to investigate learner perceptions and clarify the advantages and disadvantages of teaching and learning through the traditional textbook/CD vis-a-vis available online resources.*

### 1. はじめに

日本の大学で開講されている通訳関連クラスの実態調査が初めて行われた際に、学生の英語力不足、クラスサイズが大きすぎる、授業の目標設定が難しいなど様々な課題が挙げられている中で、通訳関連クラスで使用できる標準的な教科書<sup>1)</sup>がないことも課題として指摘されていた(染谷ほか 2005)。その後、通訳・翻訳研究が進んでいる欧州で出版された書籍の日本語版が複数出版され(例:ポエヒハッカー 2008; マンデイ 2009; セレスコヴィッチ 2009; ピム 2010; ジル 2012; ベーカー&サルダーニャ 2013)、さらに、大学の通訳・翻訳関連授業での使用を考慮した書籍が出版されるなど(例:ベルジュロほか 2010; 鳥飼編 2013)、日本における通訳・翻訳研究だけでなく、大学での通訳・翻訳教育に対する取り組みが行われている。それにより、通訳・翻訳研究を教えるクラスに活用できる教材の選択肢は増え、実際に大学の授業で鳥飼編(2013)を教科書として使用した報告もある(永田 2016)。

大学で実際に開講されている通訳関連クラスは、通訳演習中心あるいは通訳演習の一部に通訳理論の紹介が取り入れられているような形態のクラスが比較的多く、通訳訓練法を取り上げた教材自体は数多く市販されており、日本通訳翻訳学会においても「通訳教育研究及び教育書の

---

NISHIHATA Kaori, "Pedagogic materials for interpreting courses: A case study on the use of online audio-visual press conference," *Invitation to Interpreting and Translation Studies*, No. 21, 2019. pages 103-116. ©by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

文献案内」(2016)として訓練法も含めた関連書のまとめが紹介されているように、通訳訓練に使える教科書の選択肢は豊富にあるように思われる。しかしながら、通訳を初めて学ぶ受講生の多い入門的位置づけの大学の演習クラスで、授業内容全体を1冊で網羅できる定番のような教科書があるとは未だ言い難く、実状としては、担当講師の自著や通訳訓練に関する市販の教材に加えてインターネットから取得した視聴覚素材の使用など、各講師が工夫をしながら授業を行い、どのような教材を使用するかは通訳クラスを担当する講師の多くが直面している課題ではないかと考えられる。

教科書として使用されている可能性のある担当講師の自著や通訳訓練に関する市販の教材は、スクリプトを含めた本文と付属CDがセットになった形態(以下「CD教材」と表記)が一般的と思われるが、筆者が複数の通訳演習クラスを担当する中で、CD教材の使用だけでは実践的な通訳演習を行うことができない課題に直面してきた。そこで本稿では、筆者が認識した教材における問題点を基に、英日方向の訳出練習用の教材としてインターネット動画を使用した西畑(2017)をさらに発展させ、日英方向の訳出練習用の教材として記者会見のインターネット動画を通訳演習授業に使用した試みを紹介する<sup>2)</sup>。また、学期末に実施した受講生対象のアンケート調査の結果から、受講生の教材に対する受け止め方についても記述する。

## 2. 大学の通訳演習クラスにおけるCD教材の課題

まず、大学の通訳演習クラスの教材選定について問題意識を持つに至った筆者自身が直面してきた課題について説明する。1点目に、最近のトピックを扱うことができるかという課題がある。一般的なCD教材では情報のアップデートはできないため、どうしても内容が古くなりがちであり、最近のトピックを取り上げたい場合にはCD教材のみで対応することが難しい。

2点目に、1冊で授業内容全体を扱うことが難しい網羅性の課題がある。大学の通訳演習クラスでは、1学期間の15回分の授業の中で、通訳訓練法を段階的に紹介し、受講生が実際に練習できる機会を多く設けるようにしている。例えばシャドーイングを紹介する回では、シャドーイングに関する文献(例:鳥飼監修 2003; 玉井 2008)を参考にしているが、授業で取り上げる通訳訓練法はシャドーイングだけではなく、リプロダクション、サイトトランスレーションなど複数あるため、通訳訓練法の内の一つを扱ったCD教材1冊のみでは授業内容全体に対応することはできない点が課題となる。

3点目として、CD教材の場合、スピーカーの表情や身振りなどの視覚的情報がないため、実際の状況をイメージしにくい点もある。通訳の現場においては、単に音声の聞き取りだけではなくスピーカーの視覚的情報も重要であるが、CD教材ではそれが実現できない。

4点目として、どの程度オーセンティックな素材を扱えるかという課題もある。学習者用にスピードなどが調整されクリアに発音された音声のCD教材は学習しやすいメリットもある一方で、実際の状況や臨場感を伝えることは難しい。ジル(2012)が「実際の通訳における準備作業の重要性をわからせるには、実際の会議資料を使用し、学習者に実際の会議で録音された音声を使って通訳させることが望ましい。こうすれば、作業全体としては無理でも、準備に関しては実際の環境を多少とも反映した演習にすることができる。」(p189)と述べているように、実際の現場での音声や会議資料、できることなら動画などを使用できれば非常に実践的で理想的でもあるが、通訳者が

現場で仕事をした内容の録音・録画や会議資料使用の許可を個人的に取得することは困難である。

さらに 5 点目として、CD 教材が学習環境や教室環境に適さない状況がある課題がある。授業内で CD 教材を使用した場合、その CD 教材を指定教科書として受講生が購入していなければ音源にアクセスして予習・復習することができない。教室環境についても、学部で開講されているクラスの中には比較的大人数で通常教室で行うような場合もある。実際に、20 名を超えるクラスを通常教室で担当した際に CD 音声を教室前方で流したものの、受講生の座席位置により音声の聞こえ方が異なることや、CALL 教室のようにヘッドフォンを使つてのシャドーイングや訳出などの練習ができない課題に直面した。

教科書の網羅性の課題に対しては、通訳訓練法全般を取り上げている書籍は複数挙げられる(例:小松 2005; 大谷 2009; 水野ほか 2002; 鳥飼 2001) もの、いずれも CD 教材であることもあり、網羅性以外の上記の課題に対応させることが困難であった。大学での使用を考慮して作られたベルジュロほか (2009) については、通訳訓練全般を扱っているだけではなく、特にメモ取りの実例が DVD 動画を見ながら学べる点は非常に貴重である。ただし、1 点目の課題に挙げた最近のトピックを取り上げたい場合には、やはり単独での使用ではなく他の教材と併用しての使い方が必要になってくる。3 点目の視覚的情報の課題と 4 点目のオーセンティックな教材の課題に対しては、受講生自身がペアワークでスピーカーと通訳者の役割を行うロールプレイ演習や、ゲストスピーカーを招いての講演を通訳する実習による対応も可能であるが、いずれにしても、実際の通訳演習を行う前段階の基礎訓練で繰り返し練習に使用できる視聴覚教材は必要となる。

こうした状況に対応するため、西畑 (2017) では、動画が公開されていてトピックの選択肢も多く、スクリプトも入手できるオーセンティックな教材としてインターネット動画の TED Talk を使用し、スマートフォンとイヤフォンを活用することで、通常教室で行う通訳演習の課題も含め上記に挙げた 5 つの課題への対応がある程度可能になった。TED Talk を通訳演習の素材として使用する場合、言語方向は英語から日本語へ訳出となる。通訳演習クラスでは英語から日本語への訳出演習だけではなく、英語・日本語間で双方向の訳出練習を行うため、日本語から英語への訳出練習の素材となるもので、できればスクリプトも入手でき、上記に挙げた課題に対応できるものも必要である。教材選定にあたっては試行錯誤を重ねてきたが、本稿では日本記者クラブにおける記者会見のインターネット動画を通訳演習クラスの教材として取り上げた事例を紹介する。

### 3. 対象クラス

本稿の対象クラスは、2018 年に開講した逐次通訳演習の受講対象者が異なる合計 2 クラスであり、受講者数は下記の通りである。

表 1. 対象クラス

	開講年度	受講対象者	受講者数	教室
A	2018 春学期	3 年生以上	7 人	CALL 教室
B	2018 春学期	2 年生以上	18 人	通常教室

クラス A は 3 年生以上が対象の通訳演習クラスで、CALL 教室を使用しており、クラス B は 2 年生以上が対象の通訳演習クラスで、教室前方のモニターとホワイトボード、可動式の机と椅子がある通常教室を使用している。3 年生以上が対象のクラス A は受講者数が 10 名以下と少人数で、TOEIC スコアで見ると 600 点台から 900 点台までのばらつきがあり、通訳を初めて学ぶ受講生と勉強経験のある受講生が混在している状況であった。一方で、2 年生以上が対象のクラス B は、学期によって変動はあるものの 20 名を超えることもある受講者数が多い傾向があるクラスであり、通訳を初めて学ぶ受講生が圧倒的多数を占め、TOEIC スコアで見ると 500 点台から 900 点台までのばらつきのある状況であった。

いずれのクラスにおいても指定教科書は使わず、記者会見動画の教材、他の視聴覚教材と配付資料を基に授業をすすめている。クラス A と B では受講生のレベルやクラスサイズ、教室環境が異なるため、同じ教材を使う場合であっても各クラスの状況に合わせて授業中に行うアクティビティの内容を変えるなどの調整を行った。

#### 4. 使用教材

対象クラスの授業では、指定教科書は使用せず、教材の一部として、日本記者クラブの公式ウェブサイトで開催されている羽生結弦選手の記者会見を取り上げた。スピーカーの羽生選手、司会者、質疑応答におけるオーディエンスの使用言語はすべて日本語となっている。記者会見が行われたのは 2018 年 2 月 27 日で、平昌冬季オリンピックで 66 年ぶりに男子フィギュアスケートで連覇を達成した直後であり、日本だけではなく世界中からも注目を集め話題になっていたため、旬のトピックとしてもなじみのある受講生が多い状況であった。約 50 分にわたる記者会見の構成としては、ほぼすべて質疑応答に時間が使われている。

TED Talk の場合は決められた持ち時間の中で壇上に上がってのプレゼンテーション形式である。そのような事前に用意されているプレゼンテーションと異なり、記者会見の質疑応答ではどのような質問が出てくるかわからず、その場でやりとりが生成されていく現場の体験にもなり、様々な角度からの予測とリサーチを行う事前準備の練習材料となるのではないかと考えた。さらに、日本記者クラブの記者会見は、動画<sup>3)</sup>に加えて会見詳録<sup>4)</sup>が公式ウェブサイト上で公開され入手できるようになっている。インターネット動画はスクリプトが入手できないことが多く、教材として使用する場合に筆者自身で書き起こしを行っていたこともあったため、詳録をスクリプトとして使用できる点は非常に貴重であった。さらに、会見詳録の内容を確認したところ、原発言そのままの書き起こしに近い話し言葉の文体であったため、日本語特有の話し言葉の英語への訳出練習には有効であり、オーセンティックな教材の選定において重要なポイントとなった。

授業内のアクティビティとしては、受講生自らで訳出を考えてグループごとに学び合うところに重点をおいた協同学習の形式をとることとした。まず、事前課題としてオリンピックで 2 連覇を果たした羽生選手の日本での記者会見の質疑応答の通訳を自分が担当することを想定して内容を予測し、リサーチを行い、単語リストを作ってくるよう指示を出した。翌週の授業の中で、どのようなリサーチを行ってきたのかを話し合うペアワークを行い、クラス全体で共有した。フィギュアスケートの技の種類、オリンピック連覇といった英語表現、フィギュアスケートに関わる様々な組織名の正式名称について、オリンピック前に報じられていた羽生選手の怪我についてなど、各自が様々な

角度からの予測をもとにリサーチ及び単語リストの準備をしてきた内容の共有となった。また羽生選手が好きなくまのプーさんについても調べてきた受講生もいる一方で、くまのプーさんがフィギュアスケートに何の関係があるのか想像もつかない受講生もあり、ペアやクラス全体で共有することで、自分では思いつかなかった視点や通訳において必要な予測や事前準備の重要性に気づききっかけとすることができた。

事前準備で調べてきた単語をクラス全体でも確認した後に、記者会見の会場の状況や様子が分かるように実際の記者会見動画の一部を見せ、会見詳録をスクリプトとして配布した。質疑応答については、質問内容も質疑応答の長さも様々であるが、事前準備についての情報共有の場でも話題になったくまのプーさんが実際の質疑応答の中で登場した場面を下記に紹介する。

司会: それでは、最後の質問。どうぞ。

質問: 競技とは全然関係ないんですけども、競技終了後、皆さんからプレゼントが相当投げ込まれたと思うんですが、その行方はどうなっているのか。

羽生: 森に帰りました。

司会: プーさん、森に帰る?

羽生: すごくこの言葉が好きで、別にギャグとかではなくて、森に帰ったというのが一番ファンタジーでいいかなと思ったんですけども。

グループワークとしては、自分のリサーチや単語リスト作成では対応しきれなかったような用語や表現などに下線を引きながら一人一文ずつ順に音読していく指示を出した。ある程度時間を取った後で、リサーチが足りていなかったところや訳出が難しいと思われるところについての話し合いの時間を取った。記者会見総時間は約 50 分と長いとため、記者会見全体を①から⑬のパートに分けた。分け方は、質問と回答のまとまりを 1 セットとし、授業中に、区切りの箇所を伝えて①から⑬まで番号付けをするよう指示を出した。

CALL 教室を使用している少人数クラスでは、実際に羽生選手の動画音声を使用して英語に訳出する個別練習を行い、それから 2 グループに分かれて訳出が難しかったところの話し合いを行った。授業内で疑問点を解消したうえで受講生が自宅練習をしてきた翌週の授業では、各グループ内で、司会者・スピーカー・通訳者・質問者・その他オーディエンスと役割を決めてのロールプレイ演習を行い、各グループによるロールプレイ演習の発表をクラス全体で行った。通常教室を使用している受講者数の多いクラスでは、3 グループに分け、各グループ内でスピーカー役の受講生が話す日本語を英語に訳出する練習とロールプレイ演習を行った。事前準備や日本語独特の話し言葉をどう訳出するかについて自ら考え、グループワークにより自分一人の個人学習では気づかないリサーチや訳出の視点を互いに学び合う演習形態をとった。

## 5. 受講生の受け止め方

各担当授業においては、学期末に受講動機や受講前の通訳に関しての知識レベル、進路の希望、難易度が適切であったか、授業で使用した各教材や演習についての感想・コメントの自由記述など、各クラスに特化した受講生対象アンケートを行っており、実際に使用したフォーマットを

巻末に添付資料として掲載する<sup>6)</sup>。本稿では質問項目の中から 6.7.8.に絞り、記者会見教材に関しての自由記述コメント、教科書の使用の是非、音声教材としてインターネット動画と CD 教材どちらが良いと捉えられているかの 3 点について、それぞれの回答のまとめを下記の 5.1～5.3 に記す。

### 5.1 記者会見教材についての感想

羽生結弦選手の記者会見教材に関する自由記述から挙げた点として、「この教材はスピーチというより本当に話し言葉のインタビューといった感じで、通訳するのがいかに大変な作業かを改めて知ることができた」「英語スピーチとは違い、ハイコンテクストな日本語らしいスピーチで、いい意味で日本語から英語に通訳する難しさが体験しやすいものでした」「日→英の通訳は簡単だろうと思っていたのですが、意外にもとても難しく、面白い授業でした」「改まった場で使われる日本語の表現に関しては勉強になりました」「日本人の性格故の言い回し（～かもしれませんね、ちょっと～の多用など）にどう対応するか考えるいい機会だった」のように、話し言葉の日本語を訳出することの難しさについて言及したコメントが多くあった。日本語特有の話し言葉の訳出は、学習者用に編集された CD 教材ではなかなか体験することがないが、実際の現場で直面する状況を体験するオーセンティックな素材を教材として使用する効果が持てたのではないかと考えられる。

また、「自分たちがよくニュースで目にする話題なのに、訳すのが想像以上に難しく、通訳における準備の大切さを痛感した」「直訳しにくい表現も多く、難しかった。事前準備がどれだけ大切かを知った」「フィギュアスケートの会見なのに、プーさんなど異なる話題が出てくる例としてとてもわかりやすかった」のように、与えられた情報をもとに、予測やリサーチを行う事前準備から体験する演習を実施したことで、通訳には欠かせない事前準備の大切さに気づく機会とすることができた。

難易度について触れたコメントとして、日本語から英語に通訳する難しさについては感じながらも、「羽生選手の話し方が比較的ゆっくりで、初めて実際に通訳する上でちょうど良い教材であったと思う」「記者会見という固いものだったが、羽生選手ということであまり壁を感じなかった」など、教材のレベルやトピックとしては抵抗なく取り組みやすいものであったことが示唆されている。

### 5.2 「教材について教科書はあったほうが良かったと思うか」の質問回答

対象クラスの授業では指定教科書を使用せず、記者会見のインターネット動画とその他の視聴覚教材、配布資料を使用した。また各ポイントは講師が必要に応じてパワーポイントスライドにまとめて解説するようにした。「教材について教科書はあったほうが良かったと思いますか？」の質問に対して、【あったほうが良い・どちらでも良い・今のままで良い】のいずれかから選び、その下の自由記述欄に理由・コメントを記述する形式とした。

クラス A では、4 名が「今のままで良い」と回答し、4 名が「どちらでも良い」と回答した<sup>5)</sup>。クラス B では、12 人が「今のままで良い」と回答し、3 人が「どちらでも良い」と回答した。いずれのクラスにおいても、教科書が「あったほうが良い」との回答は 1 人もいなかった。対象クラスの回答を合算したものは下記の通りである。(表 2)

表 2. 教科書はあったほうが良いと思うかの回答 (n=23)

あったほうが良い	どちらでも良い	今のままで良い
0人	7人	16人

指定教科書を使用しない「今のままで良い」と回答した中で、理由・コメントに記述があったものとしては下記に示す通りである。クラスAの受講生の回答とクラスBの受講生の回答の順に表示している。(以下、下線は筆者による)

- A-1: 作られたテキストよりも生の記者会見等を扱った方がイメージもしやすく、楽しい
- A-2: 教材は費用も少なからずかかるし、プリントで済むことの方が多く感じる
- A-3: 教科書の必要性は特に感じなかった
- A-4: 今学期の内容がすごく良かった  
全員がチャレンジできて全員が楽しめた
- B-1: 毎回フレキシブルに学べると思うから
- B-2: 幅広い分野で話を聞けるため
- B-3: スライドのレジュメなどがあってもいいかもしれないが教科書は特になくてもいいと思う  
生で話されている言葉を聴く方が楽しいから
- B-4: 今のままだでも十分濃い内容であるから
- B-5: 教科書で勉強するより実践的にやっていく形式が楽しかったから
- B-6: 座って文字ばかり見るより、話して、活動した方が力になると思うから
- B-7: 実際の会見やプレゼンなどを用いることで、より実践的な練習ができたので、今のままで良いと思う
- B-8: 教科書だと最新のトピックが扱えないので TED やニュースの方が教材としては良いと思う
- B-9: 教科書はどうしてもお金がかかるのでなくていい
- B-10: 本の教科書は荷物が重くなるので、レジュメの方が良い

指定教科書の有無について「どちらも良い」と回答した中で、理由・コメントに記述あったものとしては下記に示す通りである。

- A-5: 教科書を使うことでやったことが分かりやすく手元に起こるというメリットがあるのは事実ですが使うとしても今の演習ベースのスタイルは頭に入りやすく好きだったので続けてほしい
- A-6: 教科書がなくても今回の講義の進め方で満足しているから  
ない方が実践する機会が増えて好きかもしれない
- B-11: 今学期の授業内容はとても興味深かったので、教科書に関してはどちらでも良いと思う
- B-12: どちらでも良いと思ったのは、通訳に関する基礎知識をスライドなどで勉強したので、実践でさらに自分で確かめることができたから
- B-13: 英語のスクリプトがあれば教科書はあってもなくても大丈夫

上記のコメントから、受講生のインターネットと CD の比較における受け止め方として、「最新のトピック」「オーセンティックな素材」「実践的な演習」「持ち運び」「費用」「内容の充実」のようなキーワードで捉えられる。CD 教材の使用で講師が認識していた課題の一つとして、最近のトピックを取り上げられるかがあったが、「教科書だと最新のトピックが扱えない」のコメントでも見られるように、受講生もその課題を認識していることがわかる (B-8)。「オーセンティックな素材」をどの程度扱えるかについての課題も、インターネット動画の方が「生の記者会見」「生の話されている言葉」などの表現でその意義を認識している (A-1, B-3)。また、「実践的な演習」を行うことを重視していることが習ったことの実践に対しての肯定的なコメントから示唆された (A-5, 6, B-5, 6, 7, 12)。教科書の場合は「荷物が重くなる」として「持ち運び」が不便であることが言及されている (B-10)。さらに、受講生特有の視点としては、「費用」についての言及があり (A-2, B-9)、授業内でも、教科書はある程度費用がかかることに理解は示しながらも目安として例えば 3,000 円を超えると高すぎると感じるとコメントしていた受講生が多かったことから、教科書にかかる費用はなるべく抑えたいのが率直な希望であることがわかった。「内容の充実」については、教科書を全く使わない今回の授業の進め方であっても「今回の講義の進め方で満足」「今のままでも十分濃い内容」のコメントにあるように内容を充実させた授業展開ができたことが示唆される (A-4, 6, B-4, 11)。

### 5.3 「インターネット動画と CD についてどちらが良いか」の質問回答

対象クラスではインターネットからの動画を素材として使用しているが、「音声教材として、インターネットの動画と CD とどちらが良いと思いますか？」の質問に対して、【インターネット動画・CD 教材】のいずれかを選び、その下の自由記述欄に理由・コメントを記述する形式とした。クラス A では 7 人中 6 人が「インターネット動画」と回答し、1 人がいずれの回答もなく欄外に「場合による」との記述があった。クラス B では、回答者の 16 人全員が「インターネット動画」と回答した。いずれのクラスでも「CD 教材」の方が良いとの回答はなかった。(表 3)

表 3. インターネット動画と CD 教材どちらが良いかの回答 (n=22)

インターネット動画	CD 教材
22 人	0 人

インターネット動画を選んだ理由・コメントは下記の通りであった。

- A-7: 動きも見えたほうが現実味があると思うから  
内容が面白い
- A-8: 家で予習・復習ができるのでインターネット動画の方がうれしい  
また スピーカーの表情が見えるとうれしい
- A-9: 内容が実践的になるから  
CD では編集されているため、あまり実践的ではないと感じてしまう
- A-10: 人の表情、口の動きが見えた方がやりやすいと思う

- A-11: 動画付きでスピーカーの表情、しぐさが分かるから  
家でも予習しやすい
- A-12: 自分たちで簡単にアクセスできるし身近なものを扱うことができるため
- B-14: CD プレーヤーを持っておらず、パソコンでしか再生できないので、スマホで見られるインターネット動画の方が良いと思う
- B-15: インターネット動画の方が楽しく勉強できると思ったから
- B-16: 自分で家で見るので
- B-17: CD を使えるデバイスがない  
 最近出るパソコンはほとんどないかと思う
- B-18: 動画の方が内容もわかりやすいし、聞いていて楽しいから
- B-19: 動画があったほうがより実際の状況に近いから
- B-20: インターネット動画は目で見ながら耳で聞けるので飽きないから
- B-21: 逐次通訳だと実際にスピーカーの隣にいることの方が多と思うので、その練習として視覚的なものも必要だと思うから
- B-22: 自分でも見たいときに復習できるから
- B-23: 外で見れるため
- B-24: インターネットの方が生の英語という感じがする
- B-25: スピーカーの表情や身振り手振りなど、動画の方が得られる情報が多いし、実践する際に取り入れやすい
- B-26: 好きな時に誰でもアクセスできるから  
CD だとパソコンにダウンロードしなければならず、手間がかかる
- B-27: 動画だと自分で後から見返せるし、スピーカーの振舞い方やジェスチャーも学べるので動画の方が良いと思う
- B-28: CD はプレーヤーがないと再生できないし、音声を持ち運ぶのに都合が良くないから
- B-29: 自宅で復習しやすい

インターネット動画か CD 教材かのどちらかに回答もせず「場合による」と記述していた 1 人は、「内容によると思います。インターネット動画は最新の情報を手に入れるのはとても有利と思いますが、昔のあまり流れていない情報は CD を使うのが有利と考えられます。」と記していた。その 1 人以外は、回答者全員が、授業で使用する教材として、CD よりもインターネット動画の方が良いと回答している。

受講生が支持しているインターネット動画のメリットとしては、「視覚的情報」「オーセンティックな教材」「モチベーション」「予習・復習のしやすさ／音源へのアクセスのしやすさ」「携帯性」などのキーワードで捉えることができる。「視覚的情報」については、スピーカーの身振りなどが見える方が良いと考える受講生が多く、CD 教材で実現できない課題として講師が認識している点と一致している (A-7, 8, 10, 11, B-21, 25, 27)。また、「オーセンティックな教材」として、「CD では編集されているため、あまり実践的ではない」「インターネットの方が生の英語」のコメントに見られるように学習者用に編集されたものより、オーセンティックな素材を実践的に役立つものと捉えている (A-9,

B-19, 24)。「モチベーション」については、インターネット動画は視覚的な情報もあることから、飽きずに楽しく学習できるとあり、学習のモチベーションにつながっていることが見受けられる (B-15, 18, 20)。インターネット動画による「予習・復習のしやすさ／音源へのアクセスのしやすさ」についての言及も複数みられ (A-8, 11, B-22, 27, 29)、「携帯性」とも関連性が見られるが (B-28)、CD プレーヤー自体を持っていないなどのコメントもあるように、CD よりもスマートフォンなどからでもいつでもアクセスできるようなインターネット動画の利便性がメリットとして捉えられている。

## 6. 今後の課題

通訳演習クラスについて、市販の CD 教材は多くあっても大学の授業全体を網羅できるような定番とも言える標準的な教科書がない中では教材の選定は各担当講師に任せられるところが大きく、いずれの教材を選ぶにしても音声教材は欠かすことができないものである。最近のトピックが扱えるか、スピーカーの身振りなど視覚情報も得られるか、オーセンティックなものであるかなど、従来の CD 教材の使用で直面した課題に対応するため、西畑 (2017) では英語から日本語への訳出練習の素材としてインターネット動画を授業に取り入れ、さらに今回は、記者会見のインターネット動画を使って、日本語から英語への通訳演習として授業を行い、受講生アンケート調査からは指定教科書を使わずに内容を充実させた授業を展開できたことが示唆された。

しかしながら、実際に教材として使用できるインターネット動画の素材の課題は残る。インターネットを活用すれば膨大なリソースが使用可能であるかのように思えるものの、動画とスクリプトがいつでも公開されているオーセンティックなものを選定基準にするとかなり限られ、その中から各クラスのレベルにあったものや授業で取り上げるテーマの適切性で絞っていくと、教材に使える素材としての選択肢がそこまで多くあるわけではない。動画としては教材に適している、スクリプトが入手できないような場合、講師自身で書き起こしをすることもあるが、その場合に授業準備の労力が多くかかるだけでなく、書き起こしの正確性を担保することも難しい。インターネット上では公開されておらず、CD 教材でしか入手できない音源もある。また、プレゼンテーション形式のものだけでなく、質疑応答の形式など、実際の現場がイメージできるような様々な状況でのオーセンティックな素材が使用できれば通訳演習をより実践的なものにできるが、通訳者が現場で使用した資料の教材としての使用や録音・録画の許可を個人的に得ることは著作権や機密情報の観点からも非常に難しい。そのことから、今回紹介したような動画とスクリプトが両方揃い、内容としても充実した素材はなおさら貴重である。より充実した通訳演習を行うために、受講生がいずれ社会に出て直面する可能性のある状況の体験ともなるような、大学で使用可能な英語・日本語それぞれの素材が増えることを願う。

## 7. まとめ

大学における通訳演習クラスの教材として記者会見のインターネット動画を活用した試みを紹介し、受講生の受け止め方についても言及した。今回教材として取り上げた記者会見のインターネット動画では、動画だけではなく日本語の話し言葉そのままの公式スクリプトが入手できたことで、オーセンティックな教材として、通訳には欠かせない事前準備の実践的な体験だけではなく、実際の現場で直面する可能性の高い日本語特有の表現の訳出について、また実際の記者会見にお

ける質疑応答がどのように進められるのかを学ぶ機会とすることができた。また、動画だけではなくスクリプトを活用できたことで、グループワークで互いに学び合う演習の実施や、ロールプレイ演習に発展させた実践演習を行うことができた。受講生の視点からは、インターネット動画を使った教材の支持は高く、指定教科書を全く使わない場合であっても内容を充実させた演習授業を展開することは可能であることが示唆された。

CD教材を教科書として使用することについては、CD教材にも数多くの良書があり、安定した音源で繰り返し練習でき、インターネット動画では入手できない音源も多くあるため、CD教材の価値を否定したり教科書は不要であることを主張したりすることが本稿の趣旨ではない。教科書を使用することで学習したことが手元に残る点をメリットとして捉えている受講生の声もあり、講師にとっても、スクリプトを含め既に体系的にまとめられたものがあると授業準備にかかる労力の低減や書き起こしの正確性の担保ができ、指定教科書としていけば著作権についての懸念もなく授業で使用できるメリットはある。ただ時代の流れとして、カセットテープ、ビデオテープ、CDやDVDなどからインターネット動画へと学習媒体も変わってきており、実際の現場に近いオーセンティックな教材を使用することの意義や、実際にその教材を使用して学習を行う受講生の学習環境なども、教材選定を行う際には考慮すべき点ではないかと考える。

現状においては、CD教材に課題が多くあるものの、インターネット動画で全て補えるというわけではなく、通訳演習クラスに使用可能な素材の種類の実質が求められる状況と言えるのではないかとと思われる。インターネット動画を使用する場合であっても、授業でどのようなトピックを扱い他の教材とのバランスをどうとるかは講師自身が考える必要があり、理想としては、スクリプトと動画が問題なく入手でき、大学の授業での使用が可能な多様なトピックを扱うインターネット動画の選択肢ができるだけ多くあれば、通訳クラスの様々なレベルに応じた実践的な教材として応用できる可能性が高まると考えられる。山田ほか(2017)においては、日本記者クラブでの記者会見通訳動画を使用した二言語並行コーパス構築の取り組みが行われており、大学の通訳教育の現場での活用の期待についても触れられている。そのような研究の動向などにも目を向けつつ、受講生の視点や学習環境の変化なども考慮した通訳クラスの実践が必要ではないかと考えている。

.....

#### 【著者紹介】

西畑香里 (NISHIHATA Kaori) 東京外国語大学特任講師。  
東京外国語大学大学院博士前期課程修了。ハワイ大学大学院修士課程修了。

.....

#### 【註】

- 1) 染谷ほか(2005)の原文では「テキスト」と記述されているが、教科書を意味するテキストと、スクリプトの意味で使われているテキストとの混同を避けるため、本稿では「教科書」と記述する。
- 2) 本稿の中で言及しているインターネット動画の使用にあたっては、教育機関における複製について記した著作権法第35条第1項に倣い、筆者自身が担当する大学の授業内での使用とし、スクリプトとして配布した資料は対象クラスの受講者に対する配布に限定している。また、本稿で取り上げた

記者会見動画については現行の著作権法第35条第1項が適用されないと解釈される使用方法があり得ることを考慮し、著作権者に対しても連絡を取り大学の授業で使用する許諾の確認を得た。

- 3) 日本記者クラブ公式ウェブサイト 羽生結弦記者会見動画 [Online]  
<https://www.youtube.com/watch?v=fRMNpYVJDMw&feature=youtu.be>  
(2019/5/15)
- 4) 日本記者クラブ公式ウェブサイト 羽生結弦記者会見詳録 [Online]  
<https://s3-us-west-2.amazonaws.com/jnpc-prdpublicoregon/files/2018/03/f19a03da-bb6f-44af-abc0-f4900a705839.pdf> (2019/5/15)
- 5) 1人が「どちらでも良い」と「今のままで良い」の複数回答を行っている。
- 6) アンケート調査の実施にあたっては、講師から目的の説明を授業内及び書面で行い、アンケート内容や感想・コメントなどを今後の授業改善やそのための学術研究に使用することへの同意を受講生全員から得た。

#### 【参考文献】

- アンソニー・ピム (武田珂代子翻訳) (2010) 『翻訳理論の探求』 みすず書房 [原著: Pym, A. (2010). *Exploring Translation Theories*. London/New York: Routledge.]
- ベルジュロ伊藤宏美・鶴田知佳子・内藤稔 (2009) 『よくわかる逐次通訳』 東京外国語大学出版会
- ダニエル・ジル (田辺希久子・中村昌弘・松縄順子翻訳) (2012) 『通訳翻訳訓練』 みすず書房 [原著: Gile, D. (2009). *Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training*. (Revised Edition.). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.]
- ダニツァ・セレスコヴィッチ (ベルジュロ伊藤宏美翻訳) (2009) 『会議通訳者』 研究社 [原著: Seleskovitch, D. (1968). *L'interprete dans les Conferences Internationales*. *Letters Modernes*.]
- フランツ・ポエヒハッカー (鳥飼玖美子監訳) (2008) 『通訳学入門』 みすず書房 [原著: Pöchhacker, F. (2004). *Introducing Interpreting Studies*. London/New York: Routledge.]
- ジェレミー・マンデイ (鳥飼玖美子監訳) (2009) 『翻訳学入門』 みすず書房 [原著: Munday, J. (2008). *Introducing Translation Studies*. London/New York: Routledge.]
- 小松達也 (2005) 『通訳の技術』 研究社
- 水野真木子・中林眞佐男・鍵村和子・長尾ひろみ (2002) 『グローバル時代の通訳』 三修社
- モナ・ベーカー ガブリエラ・サルダーニャ (編集) (藤濤文子 (監訳)・伊原紀子 (翻訳)・田辺希久子 (翻訳)) (2013) 『翻訳研究のキーワード』 研究社 [原著: Baker, M. & Saldanha, G. (Eds.) (2009). *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*, Second Edition. London/New York: Routledge.]
- 永田小絵 (2016) 「獨協大学における通訳翻訳関連科目についての実践報告」『通訳翻訳研究への招待』 第16号, pp.127-141. 日本通訳翻訳学会 [Online]  
[http://honyakukenkyu.sakura.ne.jp/shotai\\_vol16/No\\_16-009-Nagata.pdf](http://honyakukenkyu.sakura.ne.jp/shotai_vol16/No_16-009-Nagata.pdf) (2019/5/15)
- 西畑香里 (2017) 「逐次通訳クラスにおけるスマートフォンの活用と効果」『通訳翻訳研究への招待』 第18号, pp.125-140. 日本通訳翻訳学会 [Online]  
[http://honyakukenkyu.sakura.ne.jp/shotai\\_vol18/No\\_18-007-Nishihata.pdf](http://honyakukenkyu.sakura.ne.jp/shotai_vol18/No_18-007-Nishihata.pdf) (2019/5/15)
- 大谷立美 (2009) 『英語通訳入門！英語と日本語—文化への橋渡し・通訳者への道』 三修社

- 染谷泰正・斉藤美和子・鶴田知佳子・田中深雪・稲生衣代 (2005) 「わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」『通訳研究』第5号, pp.285-310. 日本通訳学会 [Online]  
[http://jaitis.jp/home/kaishi2005/pdf/15\\_tsuyaku-1\\_maintext\\_final\\_.pdf](http://jaitis.jp/home/kaishi2005/pdf/15_tsuyaku-1_maintext_final_.pdf) (2019/5/15)
- 玉井健 (2008) 『決定版 英語シャドーイング超入門』コスモピア
- 鳥飼玖美子 (2001) 『「プロ英語」入門 通訳者が実践している英語練習法』講談社インターナショナル
- 鳥飼玖美子 (監修)・玉井健・染谷泰正・田中深雪・鶴田知佳子・西村友美 (2003) 『はじめてのシャドーイング』学習研究社
- 鳥飼玖美子 (編) (2013) 『よくわかる翻訳通訳学』ミネルヴァ書房
- 通訳教育指導法研究プロジェクト 2011-2013 年度 (2016) 「通訳教育研究および教育書の文献案内」『通訳翻訳研究への招待』第16号, pp.190-256. 日本通訳翻訳学会 [Online]  
[http://honyakukenkyu.sakura.ne.jp/shotai\\_vol16/No\\_16-018-Kyoiku\\_shido.pdf](http://honyakukenkyu.sakura.ne.jp/shotai_vol16/No_16-018-Kyoiku_shido.pdf) (2019/5/15)
- 山田優・松下佳世・石塚浩之・歳岡冨香・Michael Carl (2017) 「記者会見通訳の二言語並行コーパスの構築」第23回年次大会発表論文集, pp.1168-1171. 言語処理学会 [Online]  
[https://www.anlp.jp/proceedings/annual\\_meeting/2017/pdf\\_dir/D7-4.pdf](https://www.anlp.jp/proceedings/annual_meeting/2017/pdf_dir/D7-4.pdf) (2019/05/15)

<添付資料> 2018 年春学期 学期末アンケート

名前: \_\_\_\_\_ 専攻: \_\_\_\_\_ 学年: \_\_\_\_\_ 年  
TOEIC スコア: \_\_\_\_\_ 点 英検: \_\_\_\_\_ 級 その他英語資格試験: \_\_\_\_\_  
通訳関連クラスの受講経験:【あり・なし】(あてはまるほうに○をつけてください)  
ありの場合は、時期と科目名を記述してください: 時期 \_\_\_\_\_ 科目名 \_\_\_\_\_  
留学・海外経験:【あり・なし】(あてはまるほうに○をつけてください)  
ありの場合: 国名: \_\_\_\_\_ 時期: \_\_\_\_\_ 期間: \_\_\_\_\_ 目的・理由: \_\_\_\_\_

1. このクラスの受講動機は何ですか？
2. 受講前は通訳に関してどれくらい知っていましたか？
3. 将来は何になりたいですか？

クラスで行った各アクティビティ・トレーニングについての感想を自由に記述してください。

4. 授業冒頭のカードを使ったアクティビティ: アイスブレイカーとして役立ったと思いますか？  
【はい・いいえ】

5. TED Talk Brad Meltzer “How to write your own obituary” 教材:

6. 羽生結弦選手記者会見教材:
7. 教材について教科書はあった方が良かったと思いますか？  
【あった方がよい・どちらでもよい・今のままでよい】理由・コメントを記述してください。
8. 音声教材として、インターネットの動画とCDとどちらが良いと思いますか？  
【インターネット動画・CD教材】理由・コメントを記述してください。
9. 中間・期末課題の通訳演習の難易度はどうでしたか？  
(あてはまるものに○をつけて自由にコメントしてください)  
【難しすぎた・難しかった・ちょうど良かった・易しかった・易しすぎた】
10. この授業全体の難易度はどうでしたか？  
【高すぎる・やや高い・ちょうど良い・やや易しい・易しすぎる】
11. オーディエンスフィードバックを口頭だけではなく、紙でももらえたのは良かったですか？  
【はい・いいえ】
12. 今回このクラスを受講して良かったと思いますか？理由も記述してください。  
【強く思う・思う・やや思う・どちらとも言えない・あまり思わない・全く思わない】
13. 今後のための提案、希望、クラスで取り上げてほしいトピックなど特にあれば挙げてください。
14. その他何でも

最後に同意書の氏名欄に記入をお願いします。お疲れさまでした。